
マレビトの樂園

山下しんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マレビトの楽園

【Nコード】

N4670Z

【作者名】

山下しんか

【あらすじ】

ふと気がつくと、幸田命司は見知らぬ廃墟に居た。それまでは、ごく普通に貧乏生活を送っていた苦学生だったハズなのだが。天をあおぎ見ればうらかな日差し。

目の前には狐顔の人物と、ロリ巨乳でとがり耳の少女。

そして、デカイ氷に包まれている自分。

凍えそうな寒さの中、それまでの経緯を思い出した命司は、どうやらここが異世界である事を理解する。

秘法と呼ばれる超常の力が当たり前にある面白そうな世界で、命司

はしかし莫大な借金を背負わされ、なし崩し的に目の前の二人の元で働く事となるのだが……。

短編と連載間違えてたので再掲しました。ご迷惑おかけして申し訳ありません。

序章 狐男と妖精女

??そう、貴方あなたは言霊ことだま使いなのですか??

??ふふ、ひどい世界なのですね、そちらは??

??なら、いつそこちらにいらっしやいませんか？ 良いところで
すよ、こちらは??

??分からない？ そう、貴方には分からないかも知れませんね??

??でも大丈夫だいじょうぶ。私が、まるで貴方の意志であるかのように、導い
て差し上げますから??

??私？ 私の名は??

気がつくと、幸田命司いとうだめいじは瓦礫がれきに埋もれるようにして、椅子に座っ
ていた。

頭上には抜けるような青空が見えるが、そこはまぎれもなく建物
の中だ。瓦礫は、倒壊した装置と屋根、それから壁の一部。そして、
その瓦礫の山の中にはテーブルと椅子があり、差し向かいにはつい
さつき出逢であったばかりの女たちの顔がある。

一人は真紅しんくの髪かみの妖精妖精っぽい少女。

そしてもう一人は、モロにキツネ顔で立派な尻尾しっぽまで生やした姉
似の人物。

現在、命司はどういうワケか、氷の塊かたまりの中から顔だけ出している
という異常な状況にある。

他方、『彼女たち』に視線を向け、こうして陽の光の下で見ると、一人？？姉かと思ってしまった者は、似てはいるが、どうも違う様子だと思えた。狐のような頭上の耳はたまに動いているし、面差しも姉より中性的だ。着ている服は、日本の神主が着ている狩衣みたいな感じで全体が緩やかだが、それでもその体格は男っぽい気がした。

そしてもう一人？？女の子、と思った人物も、尖った耳が時折動くし、チャイナドレス？？というより、ベトナムのアオザイみたいな服に、その小さな体躯を包んでいる。どれを取っても目を引くが、その小さな背丈に比して胸が大きいのが、何よりも特徴的だ。

（ロリ巨乳……）

思わず、そんな四文字が命司の脳裏を掠める。

そんな命司の視線を感じたのか、女の子は汚いものでも見るかのような視線を向けて、胸元を両腕で隠した。

と、不意に姉似的のキツネ顔が話しかけてくる。何語かもさっぱり分からない言語で。

だが、言葉は分からないものの、一つだけ確信した事がある。キツネ顔の声質は、女のものではなかった。つまり、少なくともそのテの方々から男寄りの存在だろうと思う。とはいえ、まだ明確には分からないが。

ただ、どちらにしてもこのままでは埒があかない。いずれにしてもコミュニケーションは大切だ。そう思い、命司は口を開いた。

「いや、分かんないって。つか、もし万が一姉貴のイタズラとかだったら、マジで許さないからな？」

いくら天才でオタク趣味で『腐』属性を持っているどうしようもない姉でも、多分ここまで凝ったイタズラはしないハズだ。そうは思っている、命司はあの姉に関しては、いつでも『万が一』を考えてしまう。

すると、キツネ顔はしばし考え込み、やがてどこから出したものか、一本の細く尖った氷みたいな棒を手にした。それを鉛筆のよう

に持って、命司の顔に近づけてくる。

「お、おい、何する気だよ？」

ゆっくりゆっくり、テーブルに身を乗り出して命司の『眼』に、その尖った先端を近づけてくるキツネ顔。命司は何をされるかわからない恐怖を感じつつも、精々が顔をそむける事しかできない。

が、それも？

「うわぁ！ やゝめえゝろぉー！」

命司は思わず叫んだ。いつの間にか背後に回った女の子が、その小さな体軀たいくからは想像もつかない怪力で、命司の頭を固定したのだ。左目に迫る棒の先端。その恐怖に耐えきれず、命司は両目を固くつむった。すると、

（なんか……書いてる？）

ひんやりとした、細く固い感触が瞼まぶたの上を走り回る。固い先端で書かれているので微かに痛むが、痛みを与えるのが目的ではなさそうだ。そして、両の瞼が終わると、今度は左右の耳たぶをなぞっていく。それから耳が終わると、今度は唇から顎あご、喉にかけてなぞっていった。

そして??

「おい、聞こえとるか？ 言葉分かんねやったら、眼え開けてみい」
そんな声が聞こえ、同時に頭の固定が解かれた。

（か、関西弁？）

命司はゆっくりと瞼を開いていく。

「やった！ さっすがマイスター！ だゝい成功ゝ！」
右手すぐ傍そばから、今度は女の子が理解出来る言葉を紡つむいだ。

「ねえねえ、キミ、どこから来たの？」

女の子はテーブルに上半身を乗せると、命司の顔を覗き込んだ。長く、そして尖った耳とがの先が、好奇心を表現するように上下に動く。着ている物はアジア風だが、その姿は命司に西洋の妖精を連想させた。

だが、

「しゃしゃり出てくんな、このロリが」

不意にキツネ顔はそう言うと、女の子を一睨^{にら}みする。そんな狐男の様子に、女の子は不満そうな表情を見せた。

「ロリじゃないよお。マイスター、あたしが二十三だって知ってるじゃん」

「そのナリで言うても説得力皆無やるが。とにかく黙つとれ。やつと話通じるようになったんや、脱線さすな」

どうしてか不機嫌な様子の狐男。精々が小学六年生程度にしか見えない傍^{かたわ}らの女の子が、二十三歳だという事も驚くが、それ以上に今にも掴^{つか}みかかってきそうなこのキツネ顔の態度の方が命司は気になる。もつとも、なぜ不機嫌なのか。その理由はこの廃墟^{はいきょ}を見れば、おおよそ理解出来る気がするが。

「まあええ、取り敢^あえず名前からや。俺はユート。ユート・ユーゼン。で、こつちのロリガキは、サラ・アフメドや。お前は？」

不機嫌ながらも、しかし理性的な雰囲気^{にじ}を滲^{にじ}ませて、その狐男？ユートはそう訊^きいてきた。

「違うから！ ロリじゃないから！ 結婚できる歳だからねあたしは！」

ロリガキ？？もとい、サラが横から口を挟^{はさ}む。が、再度ユートに睨^{にら}まれて口をつぐんだ。

「え……命司……幸田……命司っす……」

取り敢えず、氷漬けになって身動き取れない身の上だ。不思議なことに氷は解けてこないのだが、寒い事は寒いので、早く解放して欲しい。そんなワケで、命司は素直になるのが得策だと思った。

「エーメイジ・コーダ・メイジッス、か。アホっぽい名前やな」

言つて、ユートはいつの間にか取り出していた手帳に、命司の名前を書き連ねていく。しかし不思議な事に、初めて見るその文字も、命司はどういったものかが理解できた。漢字に近いだろうか。表音文字ではなく、明らかに表意文字のようだ。それも、原始的な漢字??歴史や国語で習った『甲骨文字^{こくごぶんじ}』とかいうものに近い。

とまあ、それはひとまず置いておくことにして、命司は取り敢えず誤りを正さなくてはならない。

「いやいやいや、違うから。俺の名前は『命司』で、苗字は『幸田』。ワカル？」

命司がそう告げると、ユートは顔を上げて命司を睨みつけた。秀麗だが、そのキツネ目が姉を連想させ、気圧けあされてしまう。

刹那、

「ぐあっ！」

ユートが投げつけたペンが額に突き刺さり、命司は悲鳴を上げた。「あゝあ。今マイスター機嫌きげん悪いからさ、ハキハキ答えた方がいいよ？」

さんざんユートに罵倒ののしされ、反論する度に睨まれたせいか、サラ（二三）までもが冷めた視線を送ってくる。

そして、投げて刺さったペンはそのままに、ユートは新しいペンでさっきのメモを修正していた。

「……で、メイジ・コーダ君よ。お前、どっから来たん？　まったく人様の高価な機材破壊しよって。くだらん答えやったら、そのままダインのカルデラ湖に浮かべたるからな？」

「沈める、じゃないの？　マイスター」

「氷は浮くやろ。まあ見ててみい。ひっくり返って、頭だけ水に浸かんねんから。……もがき苦しむ様が目に見えんで」

「やあん、コワイー！　マイスターったら鬼畜きちくねー！」

虜囚じゆうそっちのけで、空恐ろしい会話をしている方々。だがそれでも、聞こえる会話の内容から、元の世界と物理法則は似ているようだと思っただと命司は思った。

「えーと、俺はデスね……」

ここはもう、洗いざらい話すしかない。せつかく姉や現実世界から逃げてこれたのに、ここで死んでは無駄死にだ。

それは、いつの記憶だろうか。

命司の目の前には、だいぶ前に死んだ祖父の姿が在った。

人の良さそうな細い眼差し。命司の容貌は、まぎれもなく祖父譲りだ。

浄衣に身を包んだその姿。祖父は田舎の神社の神主だった。そんな祖父に、命司は色々な事を教わった。その中でも、とりわけ？「そうかそうか、イジメられたか。まあ、そんなに気にするな。人はな？ 自分の下に誰かがいないと気が済まんのだよ」

蝉時雨の中で、泣きじゃくる命司を膝に抱き、本殿の階段に腰掛ける祖父は、命司の頭を撫でながらそう言った。

「そんなのヤだよ！ ボク、悪い事してないもん！ どうしてボクがイジメられるの？」

人生という名の苦行競技会にエントリーしてから五年目ほどで、初めて経験した理不尽。それを承服できる術も、理解できる道理も、幼い命司は持ち合わせていない。

「それに耐えられんのだったら、じゃあ、お前が強くなるしかないなあ…… 幸い、お前は声に力がある。その使い方を、祖父ちゃんが教えてやるつか？」

「……ちか……ら？」

泣くのをやめて、命司は後ろの祖父の顔を見上げた。

「古来、日本には言葉に魂が宿ると信じられてきた。それを『言霊』という。祖父ちゃんはな、その使い手なんだぞ？」

何を言っているのかなんて、幼い命司には半分も分らない。でも、それがあんなら。それができるのなら、大好きな、祖父のようになん？

「そつしたら……いじめられない？」

「それは、お前が正しく使えたら、な。……祖父ちゃんの言うこと

守れるか？」

「うん！」

命司が力強く頷くと、祖父は愉快げに、そして嬉しそうに笑った。

意識が、浮上していく。

懐かしい祖父の姿は遠く消え去り、

「じい……ちゃん……」

現実が、ふいに命司を包んだ。

（どこだ、ここ……？）

ぼやけた視界がハッキリとしてくると、命司は自分が金属製で円筒形の小部屋に入っている事に気付いた。いや、『入っている』、というよりは、『詰まっている』という表現がより正しい。さらに言えば、『詰まっている』のではなく、『詰め込まれている』という状況なのだが。

体育座りで手足の伸ばせない狭さの中、視線の高さよりも少し上に、明かりの射し込む窓がある。膝が壁につかえて伸ばせない両足の代わりに、命司は両腕を床に突いて、身体を微かに持ち上げた。そして、その先に見えたもの？ いや、見えた『者』は？

（やっぱりか）

そこにいたのは、数人の白衣の男と、林立する機械の群。そしてその中心に堂々と立つのは、誰あろう命司の姉の安和だ。命司の八つ年上で二十七歳。だが、既にその社会的地位は確立されている。狂徒大学教授であり、世界でも屈指の量子物理学博士。それが命司の姉だ。

性格も顔立ちも、正に『雌狐』といった形容がぴったりの女。

実家の借金苦を物ともせず、自分だけ密かに家庭教師のバイトで金を貯め、奨学金で大学を出て、この若さで博士にまで登り詰めた。紛れもない天才であり、それだけなら尊敬にも値する。の、だ

が??

「あら、オハヨー、マイブラザー」

安和の口が動くと同時に、頭上のスピーカーから声が聞こえた。相手はバイト先の客ではない。命司は遠慮なく怒りを爆発させる。「テンメエーっ！ また拉致りやがってゴルアアア！ 俺を何回テメーの実験材料にすりや気が済むんだよ！」

そう、この状況と酷似した状況に、命司は何度もさらされてきた。安和の研究は『量子テレポート』。昔のハリウッド映画で、『ハエと合体しちゃう博士』が研究していたテーマだ。

そしてこれまでに、それに付随する人体実験の材料として、命司はムリヤリ『貢献』させられてきた。

正体不明の新薬を注射されたり、身体の一部を量子化されたり、

この間も、『並行宇宙』とやらの誰かと脳内文通させられたばかりだ。

「素直じゃないなあ、マイブラザー。いい？」

口の端を歪め、安和は右手人差し指を立てて、左右に振ってみせた。

「今回は、記念すべき最後の人体実験。その被験者にキミは選ばれたんだヨ？ この超天才量子物理学博士・幸田安和様のネ！」

額に浮かぶは怒りの証。姉の超絶自己中発言に、命司はとうとうキレた。

「コーダアンナサマノネ！ ……じゃねえこのマッドサイエンティストが！ いいか？ 俺はこれからバイトなんだよ！ さっさと解放しやがれクソ姉貴！」

「ああ、ヒドいわマイブラザー。せつかく、何の取り柄もない平凡な専門学校生のアンタが、歴史に名を残せるチャンスを与えてあげてるのに……姉さんの愛を拒絶する気？」

手弱女つばく身体をくねらせ、わざとらしく涙を見せる安和。その態度も気に入らないが、何よりこんなヤツと姉弟だという事が、

命司は一番許せない。

「ああ！ ああ！ 確実に名前残るだろうよ！ 量子テレポートだかの、世界初の事故の犠牲者だつて事でな！ つか、頼むから俺で実験すんのはヤメてくれ！ マジで俺は忙しいんだよ！ ったく、オヤジ達の借金苦から、テメーだけ勝手かつ華麗にフェードアウトしやがったクセに！」

嫌味、懇願、ついでに恨みの文句を並べ立て、命司は狭い窓にべったりと頬を押し付けて姉を睨んだ。

「身内だからいいんじゃない。他人だったら万が一の時、人道的に問題あるでしょ？ それに、親の借金で子供が苦しむのは理不尽だわ」

しらっと涼しい貌で、安和は微笑んで見せる。

知らず、命司の額に数本の青筋が浮き上がった。

「身内の方が問題あるよボケえ！ つか、マジやめろよ！ マジでバイトあんだつて！」

猛り狂う命司。だが、安和の次の言葉が命司を一瞬唖然とさせた。 「ああ、今日行けないって連絡しといたし。それに、これでも姉として、あんたの将来心配してんのよ？ その歳でスデに負け組に片足突っ込んでるアンタを、あたしが人類の未来の為に役立たせてあげようと思ったんじゃない」

唖然とした状況から、再び額に浮き上がる血管の群。それは一瞬で強度限界を超えてしまった。命司の額から一筋赤いものが吹き出し、覗き窓をステキな赤色に染めていく。

（こんのアマああああ……！）

社会に出て、何度も何度も耳にし、何度も何度も浴びせかけられた言葉、『勝ち組』『負け組』。それをこの期に及んで、実の姉から浴びせられるとは。

「大きなお世話だこのヤロウ！ まだ負け組だつて決まってねえだろが！ つか、身内ならオヤジ達の借金なんとかしてやれよええっ？ 勝ち組様よお！」

そう吠えつつも、しかし命司は姉の立ち位置？？その一点だけは分らない訳でもなかった。元々、宗教にハマった叔母の保証人になった、お人好しの親父が悪いし、マヌケな話だとも思う。そのせいで、祖父の死後に相続した神社は人手に渡り、当の両親は外国に出稼ぎ中で、一家離散状態なのだ。

だがそれでも、姉の態度は身内として許せない。

命司の剣幕に、安和は苦笑を浮かべた。そして、直後にそれは嘲笑へと変わる。

「やれやれ…… たく、だからアンタは負け組脳だつてのよ。いい？ この実験が成功したら、どんだけの金が入ってくるか分かっている？ ハッキリ言つて、ザックザクのウツハウハよ？」

安和の言葉は正論には違いない。金持ちになれる。その可能性も否定はしない、しかし、それでも譲れないものが命司にはある。

（だからって、弟で人体実験していいってコトにはならないと思ひマスよ？ オネエサマ？）

命司の一番身近な存在に、金に取り憑かれた亡者がいたという訳だ。そして、社会の『底辺』を知っている命司としては、大金持ちという存在は遠く、なりたいたいと思わない。命司はただ、日々の暮らしに困らない程度、更に言うのなら？

「知らねえよ！ 分かりたくもねえし！ 俺は学費稼ぎたいだけなんだよ！ 分かったらサッサと俺を帰せブス！」

憤懣を言霊に乗せ、命司は放った。

だが、命司の不用意な罵詈雑言に、安和は刹那、不敵な笑みを浮かべて見せた。

そんな姉の貌を見て、命司は思い出した事がある。嫌な汗が額から頬を伝って落ちていく。

（…… そうだ、姉貴、言霊に耐性あったんだつた）

過去に数回試した結果、安和は命司の声の力『言霊』の存在に付き、命司の言葉に身構えるようになった。つまり、最初から気構えを持って聞けば、命司の言霊は効力を失う。その程度能力なの

だ。

そして、放った言霊は案の定、姉には全く効かず、それどころか、むしろ彼女の感情を逆撫でする結果となった。

安和は額に青筋を浮かべると、周囲の助手達にその笑顔を向けた。
(ヤバイヤバイヤバイヤバイ！)

満面の笑みで、助手に何事かの指示を出す安和。その貌の下には、明らかに弟への怒りが埋まっている。

「んじゃ、さつさといっちゃいましょーか」

刹那に唸る機械群。

「お、おい、マジやめろよ……」

不安と恐怖が入り交じり、命司の口からこぼれて落ちた。だが、実弟の懇願にも姉の笑顔は崩れない。

安和は命司に向けて口を開いた。まるで、不安な幼子を優しくあやすかの様に。

「ダイジョーブだって。犬とネコは戻ってきたから。……ミルクしか飲まなくなっちゃったけど」

「ダイジョーブじゃねえよソレ！ 幼児退行してんじゃねーか！

つか、人格崩壊するかもだろソレ！」

「ダイジョーブだって。ジューブン微調整繰り返したんだからあ」

「ダイジョーブじゃねえよ！ 微調整でなんとかなる問題じゃねえからソレ！ つか、ハエとか一緒に入ってねえだろうなっ？」

「あ、さつきカマドウマみたいの入ったかも。まあ、いつか」

通称『便所コオロギ』のセクシーに黒光りするあの背中を想像しながら、命司の全身に戦慄が走った。

「どうせならバツタがいいです！ 是非バツタにチェンジして下さい！ それも今すぐ！」

錯乱、いや狂乱し、命司の口をついた的外れの最後の懇願？？と

いうより、むしろ哀願も？？

？？姉の笑顔には届かなかった。

「……んじゃ待ってるわよ？ 愛しのマイブラザー」

ウィンクと共にキスを投げってくる姉。

鳴動する機械群。

やがて、命司が入っている機械の中に、淡い光が満ちてくる。

光は粒子となり、それが、元々自身の身体を構成していたものと悟った時？？

「テンめええ！ 憶えてるゴルアアアア……」

そう言い置いて、命司の意識は遠のいていった。

(……ここどこ?)

気が付いた時、命司は『そこ』にいた。

そこは、広い円筒形の部屋。いや、部屋かどうか分からない。ただ、命司の周囲には、まるでモニター画面のようなものが、無数に浮いている。それらは、特に機械のボディを持っている訳ではない。あくまで、液晶モニターから『画面』だけを抜き出したかのようなものが、厚みを感じさせずに浮いているだけだった。

近くのを観察すると、それらはまるで、ドラマの一シーンを放映しているかのように常に動いている。

壮大な自然、

巨大な異形の生き物、

一見すると人間に見えるが、ツノやシッポの生えた何か。

違う画面を見る度に、違った景色が見えてくる。

今の人類よりも、遥かに文明が進んでいるかのような都市が見えたかと思えば、

まるで石器時代の建物ばかりの集落が見えるものもある。

「……なんなんだ、ここ……」

ひよつとすると、以前から念願だった、宇宙人に拉致されたという状況かも知れない。そう思ったが、自分以外に誰も見えない場所で、それを示す証拠も何もない。

命司はしかたなく、画面の一つに触れようとした。と、その時??

(そこでいいのか?)

そんな自問が湧いた。

「……つつたつて、他にできそうな事無いし……どうやったら、元

の場所に帰れるんだ？」

ただ独り、自答を返す。

（戻りたい？ 戻りたいのか？）

刹那の自問。気が付けば、目の前の画面には、姉・安和あんなが慌てふためいている姿が映っていた。

「ハハ……バカだなアイツ。なに今さら慌ててんだよ…… どんだけ自分の技術、過信してたんだ……？」

がつくりと頂垂うなだれる安和の様子に、あんな姉でも心配してくれてるのか、と、そう思った時??

安和は指を鳴らすと、助手達に指示をして室内の照明を落とし、そのまま彼らを率いて出て行った。

「……ク……クククク……」

思わず、笑声がこぼれた。

そういえばそうだ。躊躇ちゅうちうなく弟で人体実験を繰り返してきた姉が、今更いまさらこんな事で、嘆き悲しむハズがない。あの去り際に見えた苦笑くしやうは間違いない。これまでがそうだったように、どこかの居酒屋で『反省会』という名目の飲み会を開くつもりなのだ。

「まあ、仕方ねえな。こうなっちまって、今さら元の世界に未練はねえ」

冷徹れいてつにそう呟つぶやくと、同時に命司の周囲に漂ただよっていた画面が、命司の周りを高速で回転し始めた。

（じゃあ、どうする？）

再度の自問。

「そんなもん決まってる。或ある意味、姉貴には感謝してるさ。これは、またとないチャンスなんだからな」

（元の世界に未練はないのか？）

続いた自問に、刹那、様々な顔が脳裏のうに浮かぶ。

父と母。

友人達。

バイト仲間。

そして、大好きだった祖父。

だが、

それでも、

この欲求を止められない。

物心付いた時には、既に狂^{すで}っていた国。

そこから更^{さら}に、止めどなく狂^{きやう}っていく世界。

『力』を持つ者達の果てしない欲望の中で、

見えない何かにがんじがらめにされている『力』無き者達。

そして、その『力』無き者の一人ではない自分。

世界は?? 少なくとも、『命司が知っている範囲の世界』は、命司に居場所を与えてくれなかった。

大多数の有象無象^{うしょうむざう}として、ある日突然消えてしまっても、誰も気にも留^とめない。そんな存在でしかなかった。

「だから俺は?? 俺に居場所をくれる世界に行く」

そう覚悟^{かくご}が決まった刹那^{せつな}、

十数個の画面?? 『世界』が命司の周囲に固定された。

そして、その中の一つ、真正面に在るそれに命司は手を伸ばす。

（死ぬかもしれないよ?）

「分かつてる」

（二度と戻れないかもしれないよ?）

「望むところだ」

（行った先にも、居場所なんてないかもしれないよ?）

その自問に、指先が一瞬止まる。

だが??

「……少なくとも、元の世界よりは希望があるさ」

再び動き出す指先。その指先が触れると、画面に波紋はもとが広がり??

??命司はその中へと引き込まれた。

命司の意識に、徐々に感覚が戻ってくる。

(……狭いな)

最初に感じた、そんな感覚。どうも、またしても何かの装置に入っているようだ。

(ああ、さっきのつて、やっぱり幻覚か……眼を開けると、あのクソ姉貴がいるんだろうな)

成功だ！ とか騒ぎながら、しかし弟の事はほったらかしで、助手達と抱き合つて互いに喝采を送り、打ち上げに行きかけた所で、実験装置内の弟の存在に気付き、ようやく解放してくれる。そういうパターンだろう。

そんな事を考えながら、命司は徐々に眼を開いていく。

そして、視界がひらけたその時？

(……やっぱりね)

寂寥の想いと共に、そんな感慨が胸中に去来した。

目の前、透明な壁越しに、キツネ顔が在った。

(オイオイ、何考えてんだ？ コイツ)

思わず、命司は呆れ果てた。

いつもの姉のキツネ顔。のハズが、ちよつとばかり違っている。

頭に載るのは、まんま狐を連想させる耳。いつもの天然黒色の髪にまで工夫を凝らしたようで、髪は金色に輝き、綺麗に櫛を通された様子のそれは、左右をボブカットの様にして、後ろは短いポニーテールを作っていた。

新鮮ではあるが、カワイイつもりなのか？ と、面と向かって問いたくなる。

そして、姉貴しまいご自慢じまんの優秀な助手達。

(……達？ あれ？)

命司は室内を見渡した。だが、複数いたハズの助手は、そこに一人しかいなかった。

(こんな助手、いたか？)

それは、小さな女の子。

先の尖とがった長めの耳と、真紅しんくの髪に施した、左側で結ゆった肩までの長さのサイドテール。特徴的な、くりっとした大きな丸い眼差しが愛嬌あいぎょうたつぷりだ。

そんな彼女たちは、まるで実験の成功が信じられないかのように、微動びどうだにせずに両の眼を目一杯めいっぱいに見開いて、命司を凝視ぎょうししていた。

刹那せつな、命司は突然に息苦しさを感じた。どうやって入れたものか？？いや違う。レポートしたというのなら、入り口は必ずしも必要ではない。それは分かるが？？

「おい！ 開けるよ！ マジで殺す気かこのクソ姉貴！」

いよいよ酸欠がひどくなり、命司は自分が入っているガラス容器を叩いた。

だが、目の前の二人は顔を真っ青にして、必死にかぶりを振りながら、両腕を交差させている。『やめろ』というジェスチャーらしいが、しかし、切羽詰せつぱつった命司はそれに従うつもりも無いし、何より姉の機材なら遠慮えんりょはいらない。

意識に霞かすみがかかり始めた時？？

(こ、の、クソツタレがああああああ！)

??命司は全身に力を込めて、両手足を突っ張った。多分、これで容器を破壊できなければ酸欠で死ぬ。

と、不意に眼前にヒビが走り、その容器の三分の一が割れ砕けた。「ぶはあつ！ ……ザマミ口姉貴いい……イヒヒヒヒ」

これまで受けてきた仕打ちでテンションが上昇しまくり、不気味な笑声がこぼれる。

ゆっくりと新鮮な空気を吸い込みながら、命司は床に降り立つ。

ひとまず危機は脱した。あとは、どうしてか額に青筋を浮かべている『姉貴コスプレバージョン』に、怒りの鉄槌てつづいを下すだけだ。「女に手を上げるなんてサイテーよ！」などと言ってくるだろうが、そんなものはカンケーない。

「往生せえやあああああ！」

命司は『姉貴獣耳バージョン』に飛びかかった。

が???

瞬時に傍らしゅんじ かたわの女の子が間に入っただかと思つた時、

「かはっ……」

前方斜め下から、命司の腹を突き上げるように、ハイキックが刺さっていた。一瞬で呼吸が停止し、女の子が避けた場所にカエルのように落ちる。

(こ、このガキい)

呼吸困難で身体を丸めながら、視線を件の二人くだんに向けると、頭上では、彼女たちが奇妙な言葉で会話している。

と、突然命司の後ろ??ちようど、命司が入っていた容器の在る方から轟音が聞こえた。それは、何かが倒壊する音。砕け、飛び散り、連鎖的に破壊音が大きくなっていく。そして、今いる建物の屋根までが崩れ??

(ヒイヒイ!)

??命司の上に降り注いだのだった。

「……とまあ、そーゆーワケだ」

小一時間後、概略がいりやくを全て話し終えた命司の前では、ユートとサラが腕を組んで考え込んでいた。

「……じゃあ何か？ メイジ、お前は这个世界の住人ちゃう、いう事か？」

「えー？ どう見ても西の白の国の人だよこのコ」

「信じる信じないはそっちの勝手。俺は嘘うそは言つてない。……つか、そろそろここから出してくんない？ 凍死とうじしちまうよ」

氷漬けにされてから、かれこれ一時間強。言葉通り、そろそろ命司の身体は小刻みに震え、唇が紫になっていた。

「まあ、せやな。取り敢えず……」

微かに頷うなづいて、ユートはテーブルに身を乗り出すと、命司を包んでいる氷の右側に、左手で軽く触れた。と同時に、その部分？？腕一本分ほどが解けて流れ落ちた。

「おお！ ……って、右腕だけ？」

自由になった右腕。そこだけが、急に外気の熱を吸収し始める。

「まあ、その間抜けっぷりはちゃう思っけど、俺の属性宝珠ぞくせいほうじゆねる狙うとるヤツかも知れへんからな。取り敢えず、サインだけできるように右腕だけ解放したったわ」

言つて、ユートは何やら数枚の書面を命司の眼前に提示した。

「……あの、これ？」

命司が訳も分からずそう訊たずねると、

「借用証と、契約書けいやくしょ、それから、住民台帳登録出願書や」

面倒めんどうくさそうに、ユートは一枚一枚そう説明した。

「……はあ？ ……ハナシ、見えないんだけど……借用証？ って、俺が何を借りたんだよ？」

何か『胡散臭さ大爆発』な展開に、命司は思わず身構える。叔母も、こんな調子でなし崩しの宗教に引きずり込まれたのだろうかなどと、今まで考えもなかった事が脳裏を過ぎった。

が、その刹那、ユートは額に青筋を立て、椅子から立ち上がった。「……あんな？ せっかく錬金術の機材一式自腹で揃えてやな、依頼された希少金属練成してたここにやで？ どうかのバカが転移してきやがったつちゅうワケや。で、何トチ狂ったんか知らへんけど、機材ん中から飛び出して、機材一式見事に全部破壊してくれてやな、オマケに天井にまで大穴開けやがって。せやけど心の広い俺様はやな、その身寄りの無い正体不明の馬鹿野郎をワザワザ手元に置いてやなあ、破壊された機材の代金と屋根の修理費用を全額返済するまで、俺の下で働かせてやろうつちゅうとんねん、分かったか？ この……クソマヌケ野郎がああああああっ！」

両眼を見開いて、目を血走らせ、思いっきり叫んだユートは、深呼吸するとそのまま再び腰掛けた。

（ん、まあ、もっともな意見ではあるな。だけどなあ）

確かに、今の命司には頼れる存在などどこにもいない。借金を負わされる理由はもっともだと思っし、それを返済するのにタダ働きするしかないのも仕方が無い。が、その際に聞いておかなければならない事もある。

「え、……全額返済するまで、どのくらい、かかりそう……かな？」
額に刺さっているペンを引き抜いて、サインの体勢に入ると、しかし命司は手を動かさずにそう訊いた。

「……さあ？ お前の働くと、あとは幸運次第ちゃうか？ ちなみに俺は、その額貯めんのに五年かかったけどな」

不機嫌も顕わにユートがそう返し、今度はサラがそれを補足する。「ちなみに、マイスターは秘法師で収入もハンパじゃないから。キミがこれから下働きするだけなら、一生かかっても返せないんじゃないや」

ないかな？」

（ああ、それはつまり、一生を奴隷で過ごせと）

「……なる、ほど、ねえ……」

呟きつつ、命司は三枚の書面全てにサインした。

「さ、これでいいだろ？ 早く出してくれ。凍えちまうよ」

言ってユートに書類を手渡す。

それを受け取ると、

「……まあ、ええやろ」

ユートは命司の傍に立った。

そして命司を呪縛する氷の塊に手を触れる。直後、それはまるで解けて水になる過程を飛ばし、一瞬にして気体にもなってしまうたかの様に消え失せた。

と同時に、命司の身体に熱が戻ってくる。不思議な事に服は少しも濡れていない。頭上にぽっかりと開いた天井の大穴からは日差しが照りつけ、命司の身体を温めていく。

（うーん、変温動物の気持ちが良い分かるな。生きているってスバラシイ！ その上で、借金なければもつとスバラシイんだけどな）

命司は、こちらに背中を向けてサラに何事かを指示しているユートを一瞥する。

「下行って、コイツに合いそうな着替え持って来い。俺のでええで？」

「あいあい！ マイスター！」

サラは元気良く敬礼して見せると、そのまま階下へと続く階段を下りていく。

（チャーンズ到来！）

ユートは今、背を向けている。サラはいない。そして、命司は天井から壁まで続く大穴にそつと近づくと、下を覗き込んだ。高さは精々三メートルほどか。降りられない高さでもない。

もう一度ユートを見てみると、ユートは再度書面に目を通している。時折耳が微かに動き、立派な金色のシッポが揺らめいている。

どうやら、完全に油断しているようだった。
と、

「マイスター！ マイスターが学生の時に着てたコレでいいかなあ？ 何着があるから選んでもらうね！」

そんな声が階下から聞こえ、階段を上がってくる気配があつた。

（今だ！）

命司は壁の穴を乗り越えようと、そのまま飛び降りた。

「あれ？ マイスター、メイジ君は？」

「……あ？ ああつ？ 野郎！ 逃げやがった！」

そんな会話が頭上から聞こえてくる中、命司はダッシュした。

（さうて、この後どうすっかなあ）

取り敢えず、間抜けな借金取りからは逃げる事ができた。が、問題はこの後だ。

眼前に広がる、いつかのテレビで見た様な、中国あたりの伝統的な町並みに似た風景。街路を疾走しながら、どこかに隠れられる所はないものかと探す。

大通りから一本奥の平走している道に入り、命司はひとまず物陰ものかげに隠れる事にした。

「あの恩知らずがあゝ……！」

命司が逃げるのに使ったと思われる壁の穴。そこから外を覗きながら、ユートは拳を握り締めていた。

「まあ、いいんじゃない？　マイスター。どっちにしたって、あの子じゃお金にならないよ。それに、あたしがいるじゃん」

そうサラが言くと、ユートはサラの奥襟おくえりを掴つかんで持ち上げ、テーブルの上に置いた。

「アホな事言うなや。ええか？　アイツの話が本当なら、この世界とちやうとこの、異境の人間やで？　錬金術れんきんじゆつの機材一式の代金なんぞ、話にならんわ！　国共大の学者どもに価値刷り込んでやな、研究素材として売りつけたんねん！」

「でも、逃げちゃったよ？　どうするの？」

「お前は城門のところで見張つとれ。俺はセイバー仲間にそれとなく連絡しておく」

言つて、ユートはメモ帳にメイジの似顔絵を手早く描いた。

「似とるやろ？」

横線四本で眉と目、縦線一本で鼻、その下に口の横線。それに輪郭かくと髪を足すと、不思議な事に、メイジの似顔絵が出来上がる。

「ぶふっ！　うんうん！　そっくり！」

サラはケラケラと笑い出す。

「よし、んじゃ、これ持つて行け！」

「あいあい！　いつてきまゝす！」

サラは手帳を破つて渡された似顔絵を上着のポケットに仕舞しまい込むと、メイジが逃げ出した壁の穴から飛び降りて走っていった。

「……しばらく、美味いもんも食べへんな……さて、端末端末、と……」

ユートは一つため息を吐くと、瓦礫がれきを掘り返し始めた。黄色の属性を利用した、遠隔地同士のコミュニケーションツールが、この世界にはある。金属鏡の形をしたそれを使って、同業者と連絡を取るつもりだった。

夕方になる頃、命司はようやくその場所に辿り着いた。

「ぐえ……マジ広え街だ。喉乾いた……腹も減った……何より疲れ
た……」

息も絶え絶えに呟きながら、命司は物陰から『それ』を見上げる。
命司の目の前には、巨大な門があった。楼門、とても言うのだから、
横幅は門を貫く大通りよりも広く、その高さは三十メートル
を超えている様に思える。何階かの階層構造になっているようで、
土壁の途中途中に四角い窓があり、屋根はこの街の一般家屋と同様に、
瓦屋根のように見えた。基本的な造りは町並みを構成する家々と
大差ないが、その材質や作り込み加減は、民家とは比べ物になら
ないほど立派に見える。

門に正対し、今度はそこから背後を見ると、中心地と思しき小高
い丘の上に巨大な館が見えた。それは、あるいは城なのかも知れな
いが、楼門とは対照的に縦に巨大ではなく、横に巨大？いや、『
広大』というべきなのか。

そして、大通りは門とその館を一直線に繋いでいる。

（さて、問題は、あの衛兵をどうするか、だな）

命司の視線の先には、どちらかと言えば中国風の武具を身に付け、
槍を持った頑健な衛兵が二人いる。見とがめられなければ問題はな
いだろうが、万が一の事も考えておかなければならない。また、門
の内側に二人という事は、外側にも二人程度は門番が居そうだ。つ
まり、四人以上という事もありうる。

他から出られる場所があればいいのだが、ユートの所から逃げ出
し、こんな時間まで人目を避けて街を歩きまわってみると、どうも、

この街は城壁^{じょうへき}に取り囲まれている様子で、街から出るにはどうしてもこの門を抜けなければならぬようだ。その上で、件の門番^{かたん}の衛兵達が、どうしたって障害になる。

こういった場面、映画なんかでは『入るのは難しいが、出るのは楽だ』という判断でいいのだろうか。いや、だがそれでも一つ問題がある。

それは、命司^{めいじ}の風体^{ふうてい}。ジーンズと、ジャケットの下のTシャツ。ごく普通の格好のつもりが、どこか時代がかった衣装が多いこの街の住人と比べ、かえって目立ってしまったている。住民の中には西洋風の服を着た連中もいるが、それもまた、精々が十七世紀とかその辺の、半端^{はんぱ}に時代がかった服装だ。命司のものは明らかに違う。「ジャケット脱げば、労働者っぽく見えねえかな……あと、スコップとかツルハシとかあれば、ソレっぽく見えるかも知れん」そう呟いて、ジャケットを脱いだ時？

「上着、持っててあげようか？」

そんな親切な言葉が届いた。

「あ、ありがとう。頼むよ」

ついっられて笑顔で振り返った先。

「って、うわああ！」

思わず一声叫び、命司は後退^{あとずさ}りした。

目の前には、サラがにんまりと微笑^{わら}って立っていたのだ。

「……ね、お姉さん怒らないからさ、帰ろうよ？」

命司の様子に苦笑^{くしやう}しながら、サラは手を差し伸べた。

（やべ、どうすっかな。なんかコイツ、バカ強いし）

初対面の時を思い出す。胸以外、精々が十二歳程度の女の子にしか見えないこの人物。だが、彼女が放った一撃で、命司は一瞬で動きを封じられた。何か武術を知っているのは間違^{まちが}いなさそうだが、それもかなりの達人だろうという事は、格闘^{かくとう}が素人^{しらうと}の命司にだってよく分かる。

いずれにしろ、すぐに対処は思い浮かばない。だったら、考える

時間が必要なだ。

「つか、ユート……だっけ？ アイツはさすがにキレてるだろ？」
笑顔を引きつらせながら命司が訊いてみると、

サラはぶつくりと頬を膨らませた。左手を腰に当て、右手の人差し指を眼前で左右に振る。

「それはキミの自業自得でしょうが。でも、大人しく帰るなら、あたしがマイスターに口添えしてあげるよ。それに、キミがマイスターをどう思ってるかはなんとなく想像できるけど、そんなに悪い人じゃないよ？」

（いい人、でもないんだろ？ どう見ても、守銭奴ってカンジだったし……）

「知るかそんなもん。前の世界でも借金で苦勞してんだよ俺は。それなのに、この世界で人生のリセットかけようとしたら、ハナから借金背負ってるって、どんな罰ゲームなんだよ？」

話しながら、命司は気付かれないように距離を取る。もうこうなったら強行突破あるのみだ。門番の間を全速力ですり抜ける。

「マイスターはねえ、あれでもキミの事心配してるんだよ？ キミ、ここから逃げてどこ行くのさ？ 戸籍も無いならまともな仕事には就けないし、場合によっては衛兵に捕まって、牢屋に入れられちゃうんだよ？」

微かに怒った様な貌をして、サラは必死に説得してくる。

だが、今の命司は自由が欲しい。『マトモな仕事』に就けないなら、裏を返せば『マトモじゃない仕事』になら就けるといふ事だろう。殺人にさえ手を染めないなら、それも悪くはない。少なくとも誰かの下で借金を返す為だけに働くより、よっぽど人間的なんじゃないかと思う。

「悪いな。アンタの気持ちは嬉しいけどさ……」

命司は声に力を込めた。

「俺は自由が欲しいんだ。だから、見逃してくれ……」

刹那、サラの反応が鈍った。

「……あ、え……でも……」

逡巡^{しゅんじゆん}が、彼女の中で生まれたように見えた。

（言霊^{ことだま}効いた！ ラッキー！）

一か八かの賭^かけではあったが、命司はサラに背を向けて門へと走った。全速力。疲れてはいるが、それでも全身に鞭打^{むちうち}って足を動かす。ゴールは門の向こう側にある、『真の自由』だ。

「って！ ああ〜っ？」

背後から、正気に戻ったサラの叫びが聞こえた。

（クソ！ 効果切れるの早ええよ！）

動揺^{どうよう}するが、しかしそれで速度を落とすわけにはいかない。

背後から、軽く、しかも速い足音が聞こえてくる。サラの方が足が速い。

そして前方では??

「待て待て、止まれ！」

そう言つて、門の左に立つ衛兵が立ちはだかった。

（右……いや、すり抜けるなら左だ）

「止まらんか！」

右側の衛兵も駆けつけてくる。

そして、目の前の衛兵が槍^{やり}を構えたその時??

「てえりやああああ！」

そんな気合と共に、

「ごはあつ？」

目の玉が飛び出るほどの鋭い打撃を後頭部に食らい、命司は意に反して数メートルほどスライディングを決め、衛兵の足にタッチダウンした。

「ぐおお……いいいてえええ〜っ！」

両手で後頭部を押さえ、足をばたつかせてしばらく悶絶^{もんぜつ}する。

そんな命司に、ヤリの穂先^{ほさき}が突きつけられた。

「これから閉門だというのに、何用か！ 珍妙な格好をしておって、怪しいヤツめ……お嬢さん、ご協力感謝しますぞ」

言葉尻で衛兵が視線を向けたのは、案の定サラだ。

「あ、いやや、違います。この子うちの新人入りで。最近この街に来ただけで、白の国にお使い頼んだら、あつという間に飛び出して行っちゃってね。夕方に閉門する事も知らないイナカモンだから、ほんつと、指導が大変なんですよ……あはは……」

乾いた笑いをこぼすサラ。

「ほう、それは大変ですな。ところで、一応、身分の判る物を提示願えますかな」

そんな言葉に、命司は思わず身体を固くする。

「ああ、このコの方、まだ申請中しんせいで。あたしで良ければ。……はい」
言って、サラは一枚の名刺大の金属板を手渡した。

「……ほう、セイバーですな……護衛士サラ・アフメド。位階は第四階位武術士。マイスターは……なんと、ユート・ユーゼン殿ですか。それでは、この若者はユート殿のお弟子さんでしですか？」

「ああ、そんないいものじゃないの。タダの小間使いだから。……じゃ、お騒がせしました」

言って、サラはそそくさと命司の右足首を掴むと、衛兵に背を向けた。

そんな彼女の背に、一礼した衛兵がもう一声をかける。

「届けは、なるべく早く出して下さいね」

「あいあい……！」

愛想笑いを浮かべ、サラは悶絶する命司を引きずって、来た道を戻っていく。

「くっそ！ 離せよ歩けるから！」

「ダメー！ 逃げるんでしょっ？」

「逃げないから！」

そんなやりとりのあと、命司はようやく足を解放された。

「ったく……」

立ち上がり、身体の汚れを払い落しながら、命司が呟く。

「なによ、その態度。分かってないんでしょうけど、キミ命拾いし

「ただだからねっ？」

左手を腰に当て、右手で命司を指し示してサラは憤然^{ふんぜん}としている。その言葉に、衛兵^{えいへい}が構えたヤリの穂先を思い出した。鋭利^{えいり}な先端と、無慈悲^{むじひ}な金属^{かがや}の輝き。比較的^{ひかくてき}平和な？？少なくとも生死に関わる様な争乱を経験した事のない命司でも、それが人殺しの道具だという事は理解出来る。

そして、仮に衛兵の脇^{わき}をすり抜けることができたとしても、背後から刺されていたかもしれないという事も。

だが、それでも命司は譲れない。奴隷^{どれい}になるために、この世界に來た訳ではないのだから。

「……なあ頼むよ。俺は自由になりたいんだよ」

そんな懇願^{こんがん}を投げてみる。これは本気だ。だからこそ、あえて言^{こと}霊^{たま}は使わなかった。

「……ね、ちよつとお話ししょつか……來て」

そう言つと、サラは命司の手を取り、どこかへと引つ張っていくのだった。

数十分後、二人が着いたのは大通りの中間点。丘の中腹に位置する、噴水の在る円形の広場だった。

丸い池の中央に聳え立つ、巨大な十字の彫刻。その頂点から、水が溢れ出して落ちて行く。

そんな広場の南側にあるベンチに、命司は誘われた。

「……へえ、悪くないな……」

丘の中腹ながら、南側に視線を送ると、眼下に街並みが広がり、この都市の構造が良く理解できた。

ここは、湖の上に浮かぶ水上の城塞都市。先刻までいた門は、この都市の内と外を隔てる門なのだ。門の外は、そのまま外輪山まで一直線に大きな橋が延びている。見た限りの印象では、橋だけでも十キロメートルくらいの長さがありそうだ。

（……綺麗、だな……）

自然と、命司はそんな感慨を胸中に満たしていた。

夕日に照らされ朱色に映える壁と、斜めに落ちる影のコントラスト。街並みはどこか中国風で、異国情緒と共に懐かしささえも感じさせる。二階建て以上の建物ばかりだが、路地が広いせいも、東京のような狭苦しさは感じない。機能的でいて、しかし人間的な温かさを感じさせる街だと思った。

「メイジ君はさ……」

不意に、ベンチに腰掛けたサラが、夕暮れの景色を見つめながら口を開いた。

「マイスターのところにいた方が、いいと思うんだ」

夕日の光のせいだろうか。それまで小さな少女にしか見えなかつ

たサラの愛嬌^{あいぎょう}たつぷりの面差しが??その横顔が、急に大人びた色を載^のせる。

「……何が目的なんだ? 初対面の、それも得体の知れない俺なんか……金にだつてなんねーだろうし。奴隷^{どれい}欲しいんなら、もっと丈夫^{うぶ}そうなのいるだろ。……まあ、機械とか家とか、壊したのは悪かつたけどさ……でもあれ、不可抗力^{ふかこうりょく}つつーか、俺だつてやりたくてやったワケじゃねーし」

それを聞いて、あはは、と、眉根^{まゆね}を寄せてサラは笑った。

「そうだね、正直、マイスターが何考えてるかなんて分かんないけど、でも、なんか価値があると思つたみたいだよ? 異境の人間つてだけで珍しいし、価値出たら売るとか言つてたけどね」

「けっ……守銭奴^{しゆせんど}め……」

吐き捨てるように命司は呟^{つぶや}く。

だが、サラはそんな命司の顔を、真摯^{しんし}な表情で見据^{みす}えた。

「だからさ、借金なんて気にしないでいいと思つよ? ……それより、住む場所と……ひよつとしたら秘法を学べる場所が、キミに与えられたかも知れないんだよ? この機会を、もっと大事にするべきだよ」

「秘法? つて、なんだよそれ」

「青、赤、黄色、白、黒、それと、光と闇。この要素で、世界は出来てるの。それを自在^{あやつ}に操つて、奇跡^{きせき}を起こす技……つてとこかな」

そんなサラの説明に、命司は思わず苦笑^{くしやう}する。確かに身をもつて体験した事だ。氷漬^{ひやひや}けにされたり、眼、耳、口に何かをされて、こうして異境の人間と不自由なく会話をしている。奇跡以外のなにものでもないし、今更^{いま}それを疑う道理も無い。

「魔法みたいなもんか? ……つたく、えらくファンタジーな世界に来ちまつたもんだ」

『魔法』という言葉聞きとがめて、サラは頬^ほを膨^{ふく}らませた。

「魔じゃないよ、人聞きの悪い。そんな怪しい宗教みたいなものじゃないの、秘法は。ちゃんと理論があつて、体系づけられてるれっ

きとした学問なんだから。ってゆーか、あたしはむしろ、メイジ君の特殊な能力の方がよっぽどファンタジーだと思うよ？ なんなのあれ」

急に問われ、命司は一瞬頭をひねった。が、すぐに思い当たる。

「……ああ、言霊ことだまか。あんなもん、たいして役に立たないだろ。アスタもすぐに正気に戻ったしな。前の世界じゃ、もっと便利に使えてただけだよ……」

だが、サラは不思議そうに命司を見ていた。

「そうかなあ？ あたしは武術士の訓練で、対秘法訓練も受けたから、精神的な攻撃にも多少は耐えられるんだよね。立ち直りも早いしさ。でも、メイジ君のはバツチリ効いちゃったからなあ……あ、でも、マイスターには効かないと思うから、変に試さない方がいいよ？ 下手に機嫌損そこねたら大変だからね？」

「……まだ、ユートの厄介やっかいになるとは決めてないぞ」

「頑固がんこだねえ……じゃあ、こういうのはどう？ 一週間くらい泊まっただけ？ この世界に慣れてきたら、改めて逃げればいいよ。手伝ってはあげられないけど、うまくやれば見逃してはあげる」

（……信じていいのかな……でもコイツ、サバサバした性格っぽいし、嘘言うそうヤツだとも思えないんだよねあ）

これまで、バイト先や学校で、幸か不幸か命司は人を見る目を養ってきた。どこぞのバカ役人よりは、よっぽど人を見る目は確かだと思っている。

「嘘じゃないって保証は？」

最後の確認として問うた命司の言葉に、サラは困ったような微笑ほほえみを浮かべた。

「疑り深いなあ……まあ、その方が頼もしいけどね。……キミ、ちよつと境遇きんぐうがあたしと似てるからさ。嘘だっただら煮るなり焼くなり好きにしていよ。えっちな事もしたい放題って事で！」

グ！ と、頬ほほを染めながら親指を立てて見せるサラ。

命司は思わず啞然あぜんとしてしまう。

「……いや、それはいいや。俺、ロリな趣味ないし」

刹那、サラの額に青筋が浮いた。

「し、失礼だねキミはっ！ このセクシーダイナマイツな大人の女性を前にして！」

言って、サラはその豊満な胸を両手で押し上げて見せる。

が、命司にはどう見ても、精々『発育のいい小学生』が背伸びをしているようにしか見えない。

「いやいやいや、間違った小学生にしか見えないから、マジで」

「こ、これでも二十三歳なんだからねっ？ もうとつくに結婚だってできるんだからっ！」

悔しいのか、サラの目尻に涙が滲んだ。

ふと気がつくと、周囲には夕暮れ時の恋人たちが増えていて、命司とサラの、そんなやりとりを微笑みながら観察していた。

命司は急に気恥ずかしくなる。

「ああ、ああ、分かったからサラ姐さん。はいはい、セクシーですねー」

「もっつ！ バカにしてえっつ！」

ブンブンと、拳を振り回し始めるサラ。「キーツ！」という書き文字を彼女の背景に当てたら、表現的に完璧になりそうな勢いだ。

（いや、これで二十三って、絶対ムリがあるだろ……）

思わず、そんな感慨が命司の脳裏を過ぎった。

「分かったから、帰ろうぜ？ な？」

「ふん！ いいよ今更！ キミの事なんかもう知らないっ！」

すっかり臍を曲げてしまったサラ。だが、苦笑しながらも命司が歩き出すと、むくれっ面で、その後をついてくるのだった。

半ば廃墟と化したユートの家？？集合住宅の一戸に戻った時、

「遅いでサラ！ 何やとつたんやボケ！」

二人は、ユートのそんな一喝で出迎えられた。

命司にとっては初めて入る居間。一階は三部屋で、キッチン併設の居間と、その奥に個室らしきドアが見える。恐らく、ユートとサラ、それぞれの個室なのだろう。

日はもう沈みかけだが、居間は天井の照明によって明るく照らされている。電灯、という訳でもなさそうだが、広口ビンの様な形状の照明器具の中には、柔らかく発光する石のようなものが一つ入っている。それは、半ばほどが照明器具の中の透明な液体に浸されていた。

「ゴ、ゴメンなさい。って、あっちゃ……」

引きつった笑みを浮かべたかと思うと、サラはそう言って、右掌で顔を覆った。

湯呑み茶碗の様な食器を片手に、新聞らしき書面を見ているユート。その足元に、二人ほど氷漬けにされて転がされている何者かが居る。顔つきを見れば、どう考えてもカタギじゃないのは明白だ。詳しい事情は分からないが、強盗か何かの類なのだろう。

「さあ、さつさと衛兵呼んでこいよ」

そうサラに命令すると、ユートは転がっている男の一人？？その頭を踏みつけた。

「マ、マイスター、怪我はない？」

それは、心配からきたものか、それとも怒られたからなのか、半ば狼狽しているようにユートを観察しながら、サラが訊ねた。

だが、ユートは何事もなかったかのように、不敵な笑みを浮かべて見せる。

「俺がこんなヤツらに遅れを取るかアホウ。ったく、このクズ共、俺の属性宝珠ぞくせいほうじゅが欲しいんやったらな、黄色属性の秘法師連れてこいや。それも、メツチャ腕の立つヤツ」

冷徹れいてつに言い放つと、ユートは命司を見据みすえた。思わず、命司は担任に悪事がバレた学生のような気分になる。

そんな命司の脇わきをすり抜け、サラは再びどこかへ出かけて行った。恐らくは、衛兵を呼ぶためだろう。

「さて、メイジ君よ。手間かけさせよつて。言いたい事は山ほどあんねけどな……取り敢えず、これに着替えてこいや」

言つて、ユートは命司に服を投げてよこした。

「着方なんて、知らねーぞ？」

「アホか。広げたら服の構造解わかるやろ。あとは頭使え」

（まあ、いいんだけどよ……）

「二階借りるぜ」

そう告げて、命司は木製の急な階段を登った。

登った先、二階には照明は無く、代わりに天井の穴から、落ちたばかりの夕日の残光が射し込んでいる。

「……綺麗な、街だよな……」

思わず、命司は呟ささやいていた。

灯りのともり始めた家々の窓。天井から続く壁の穴から、そんな風景が見える。上を見上げれば、残光の中に星が瞬またたき始めている。あの都会の摩天楼まてんとうと、その狭間はざまから微かに見えるだけの霞んだ空と比べると、そこには格別な美しさがあった。

「……ま……いつか。めんどくせえ」

渡された衣服一式を眼前に広げ、命司はそれを着る決意をした。

どうにも、サラに恩義を感じてしまっている自分がいる。ユートに関しても、氣にクわない点は色々とあるが、確かに今逃げ出さなくとも、この世界の仕組みやシキタリ、掟おきてや法律、そんなものを知

つてからでも遅くはない。

それに、

「秘法……ね」

サラから聞いた話が、実は命司にとって非常に興味深かった。言
い方が違うだけで、平たく言えばそれは魔法だ。そんなものが使え
るようになるのだというのなら、確かにここにいる価値はある。専
門学校で経理を習うより？ いや、例えば有名大学を出て、官僚や政
治家になれたとしても、その後で欲にまみれ、殺伐とした人生を歩
むより、よほど刺激的、かつ充実した人生が送れるのではないのか
そう思ったのだ。

栄達というものに興味がある訳ではないが、せつかくこの世に生
まれたのなら、命司とて『面白い人生だった』と言って死んでいけ
るような人生を歩んでみたい。

小一時間後。

サラが衛兵を引き連れて戻り、衛兵が侵入者^{しんにゅうしゃ}を連行して行った後で、テーブルを囲むようにして、三人は椅子に腰掛けていた。

「……ハア？ お前、ナニユーとんの？」

命司が秘法を学びたいと言うと、ユートは啞然^{あぜん}とした顔を向けてそう言った。

「いや、そしたらさ、俺も、少しはアンタの役に立てるじゃん？」

努めて真面目に切り出したつもりだったが、まあ、説得するのは一筋縄^{ひとすじなわ}ではいかないことくらい、命司とて予想済みだ。だからこそ、命司は重ねてそう言ってみた。

が、ユートは氷の様に冷め切った視線を、命司ではなくサラに向ける。

「……お前か、焚^たきつけたんは。コイツ秘法師^{ひせうし}になるゆうことが、どないに大変なんか分かってへんみたいやで？ 属性宝珠^{ぞくせいほうじゆ}とかどないすんねん？ 秘専^{ひせん}の学費は？ 学院が認めへんで秘法師やつとると、ゴツツ違法^{いはう}なんはお前も分かってるやんな？ 借金だらけの俺がやな、お前の武専^{ぶせん}の時みたいに、ホイホイ金出せる思っやな？」

「わ、分かつてるつてばマイスター。で、でもほら、前にも依頼^{いはん}の報酬^{ほうしゆ}が属性宝珠^{じゆ}だったりした事もあつたでしょ？」

引きつった笑みを浮かべるサラをよそに、ユートは扇^{あお}ぐように手を振ってみせた。

「アカンアカン、お前、秘法師が属性宝珠取り込むとき、どんだけ危険なんか分かってへんやろ？ 体質に合わへんかったら、最低でも三日三晩寝込むんやで？ そないな危険な事させられっかいな。

……大切な売りもんやのに。なあ？」

最後の「なあ？」の部分で、ユートが命司に視線を送ってくる。

（いや、知らねーし。つか……）

「属性宝珠って、なんなんだ？」

堪えきれず、命司はそんな問いを口にした。今日この世界に来たばかりの人間を前にして、目の前の二人は遠慮なく専門用語を口にしてくれる。

「五大属性の説明は聞いたか？」

返ってきたユートの問に、命司は頷いた。あの広場で、サラから聞いた話の事だ。

「平たく言つとやな、俺ら秘法師は、世界に満ちた根源的な力を五つに分類したワケや。で、その根源的な力を人に利用できる形に変換する触媒が、属性宝珠つちゅー代物やねん。俺は黒の秘法師やから、水を司る属性宝珠を取り込んだる」

（黒、ね。腹黒そうなコイツにピッタリだぜ）

そう思い、内心でほくそえんだ時、不意にユートの手元からペンが飛翔して??

「うがつ！」

??メイジの額に突き刺さった。

「ナニしやる！」

あまりの激痛に涙目になりながら立ち上がる。

と、ユートは片掌を突き出して、命司を制した。

「いや、まあ落ち着けや。お前の中から、実に失礼な波動を感じたもんやからなあ。……で、話の続きやけど、その属性宝珠つちゅーんが、これまた高価なシロモノでな？ まあ、一番やつすいもんでも、売れば一家族が一生遊んで暮らせるだけの価値があんねん。ちゅーても、遊び方にもよるやろけどな。せやから、依頼で報酬が属性宝珠やつても、お前にやれへん。ま、残念やけど、諦めえや」

「……マジか……おおーい、誰だよ、氣い持たせるようなこと言いやがったヤツは」

落胆し、命司はサラに恨みがましい視線を向ける。

「い、いや、でもほら、この先なんてワカンナイじゃない？　なん
だつたら、あたしが武術教えてあげよつか？」

愛想笑^{あいそわら}いを浮かべるサラに、じつとりとした視線を送りながら、
命司は口を開く。

「いらねーよ……俺、ケンカとか向いてねーし。そもそも平和主義
者なんですよ？　俺は」

命司の言い様に、ユートは苦笑^{くしやう}を見せた。

「そないなツラやな。まあ、しばらくサラに預けるさかい、出来る
ことだけやつとれや」

「りょーかい」

言つて、命司はテーブルに突つ伏した。

（くっそ、結局下働きの奴隷^{どれい}かよ。絶対逃げ出してやる）

「あ、じゃ、じゃあ、ゴハンの支度^{したく}するねっ！　命司も手伝つてよ」

どこか間を取り繕^{つくろ}うかのように、サラがそう言つと、

「……ヘイヘイ、了解^{りようかい}でござんすよ、サラ姐^{ねえ}さん」

命司はスジ目のままで立ち上がった。

二章 王侯貴族と転移秘法 01

?? やつと、あの方がこの世界に来て下さった??

?? それでは、早く我が家宝を見つけておかない??

?? あの者達も、巧く事を運んでくれると良いのだけれど??

夕方から降り始めた雨は、日が落ちると共に強まり、雷雨へと発達した。

本来ならまだ残照がある筈の時刻でも、既に外は真の闇を形成している。

世界最大の研究教育機関である国際共立大学。その構内には、職員や学生が寝泊まりする為に、幾つかの寄宿舍が配置されている。漆黒の瓦屋根に丹塗りの土壁、一階の廊下と部屋には花崗岩の床。造りは素朴だが、しかしその構造は機能的で、何より建築に際し多数の秘法師を動員したため、最高級の堅牢さを誇っている建物だ。そんな寄宿舍の玄関にて、黒の国の王族付き女官エシユマは、主の帰りを待っていた。今日は主が学んでいる武専の授業が長引いているらしい。エシユマもまた武専の生徒ではあったが、学級が違いう為にこうして宿舍に先に帰って、主の帰りを待っている。

と??

雷鳴とどろく豪雨の中から、鎧で完全武装した主が玄関に飛び込んできた。

「うわー！ ひどい雨だねこれは！」

エシユマの主は、顔立ちにまだあどけなさを残す若い騎士見習いだ。王位継承権の順位が低いいため、王族の中でも比較的気楽な地位

を得ている。権威ある武専とはいえ、祖国から離れて暮らしているのもそういった理由が大きい。

「エラル様、お帰りなさいませ。お風邪を召しては大変です。早々にご入浴ください」

エシユマはタオルを手渡しながら、微笑んだ。

エシユマの主？エラルもまた同じように微笑む。二人共に、笑顔がよく似ている。だが、似てはいるものの血の繋がりは無い。

背中で三つ編みにした白銀の長髪。額から生えた、黒の国の民の証である一対の小さな角。面差しは秀麗で、肌の色は北国の雪のようだ。そんな似通った容姿が、しかしエシユマに重要な役目を課してもいる。

その役目とは、つまり影武者だ。遠く本国から離れ、世界一安全だと言われている法治国家『ダイン』で暮らしているとは言え、いつなんどき何があるかは分からない。だからこそのエシユマの存在なのだ。

「ありがとう、そうさせてもらうよ。……あ、そうだエシユマ。これ、直せるかな？」

そう言つと、エラルは首にかけていたペンダントを胸甲の中から取り出した。黒い組紐に通された、大粒の黒曜石。その表面には、両刃の戦斧の意匠が彫刻されている。それは、エラルの母の形見の品だ。

「どうかなさいましたか？」

エシユマが訊くと、エラルはペンダントを首から外した。そして、それをエシユマに手渡すと、そのまま自室に向かう。

エシユマもまた、手渡されたそれを観察してみると、エラルが言いたい事にはすぐに気付いた。

「あら、切れかかってますね。今日の授業ですか？」

ヒモは丈夫な筈ではあるが、長年の使用と武専での過酷な授業で、そろそろ取替時の様子である。

「痛いー撃貰っちゃったからね。とどめになっちゃったかも。直る

かな？」

自室の扉の前に着くと、エラルは鍵を開けながら訊いた。
エシユマは頷いた。

「確か、エラル様のお荷物として、数本の予備を同梱してあった筈です。あとは私がお引き受けいたします故、どうぞ、ごゆっくりお身体を温めていらして下さい」

「そうさせてもらうよ。じゃ、エシユマ、また後で」

エラルは自室に入って着替え一式の入った袋を手につくと、エシユマと入れ替わるようにして、大浴場へと向かった。大浴場は、四つある寄宿舍の中心に位置し、それぞれの寄宿舍と二階の渡り廊下で繋がっているのだ。

「さて、紐はどこに入れていたかしら……何せ、エラル様の大切な品。お帰りになる前に、仕上げなければ」

勝手知ったる主の部屋。エシユマは日々エラルの身の回りの世話をしている。その為、エラルの部屋は、本人以上に熟知していた。カーテンを閉め、照明を点けると、椅子と机とベッドしか無い簡素な部屋の中で、エシユマは紐を探し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670z/>

マレビトの楽園

2011年12月20日17時50分発行